



野沢で得たもの。そして未来への課題

# 新たなインタースキーは野沢から始まる

文  
志賀仁郎  
(スキーヤーナリス)

## 「インタースキーって何だ」

野沢温泉の日影ゲレンデに準備されたパークに華麗なスキーショーが展開されていた。

参加した35の国と地域の選りすぐられた名手たちの繰りひろげる集団滑走は、従来のどのインタースキーよりも華麗であった。

観覧席を埋め、斜面の両わきにしがみついた大観衆は、その滑りに合わせて、身体をはずませ拍手を打ち歓声を上げる。それは巨大なロックショーのような空間を雪の上に造り出していた。

日影ゲレンデは雪のお祭り広場であった。そのお祭りに人々は酔い、楽しんでいった。

「次回からは、参加各国によるデモンストレーションはやめ、いくつかのグループに編成して、ショーとして楽しいものになりたい」。4年前、野沢での第15回インタースキー開催が決まったときから、国際スキー教育連盟(IVS)会長、フランツ・ホビヒラー教授が言い続けていた。その夢が実現したと言っている。

野沢の人々は、サンアントンでの決定のその日から一日の休みもなくこの大会への準備を積み上げてきた。IVSの提示したプラン。三つの部会からの要求、そのすべてに誠実に応え、周到な準備が進められた。要求の中には、野沢の人々に、埋不慮と思われるものもあったはずだが、彼らは、それに、ひとつひとつ対応していった。

「デモンストレーションではなくショーだ」というホビヒラー教授の提案は、従来の

インタースキーをサンアントンで締めくくり野沢からは新しいインタースキーを始めようとする意図が見えた。

「インタースキーの新しい出発」それが野沢のテーマだったのである。

しかしながらショー化した新たなインタースキーとする要求に、野沢の人々は戸惑っていた。彼らが招致しようとしたインタースキーは、「世界中のスキー指導者が集まって、スキー技術、指導理論を公開し、討論する会議であり、スキーという雪の上のスポーツの進歩発展のためのさまざまな提案の場、情報交換の場であり、さらにそれは、スキー指導者たちの国際的な親睦を深める巨大な友好の広場である」といったものであった。

「デモンストレーションをショーとする」とを推し進めれば、果たして従来のインタースキーのイメージを守ることができないのではないか」という不安があった。

野沢の人々はショーという言葉を使うことに最後まで抵抗をみせていた。

ホビヒラー教授は「ショーとして楽しく見せることによって、一般の大衆にインタースキーをより親しみの持てるイベントにすることができ、それが、低迷するスキーマーケットを刺激することにもなる」と語り、一般大衆の働きかけが従来では不十分であったと説いていた。専門家だけの集会ではなく、一般のスキーヤーたちの参加するインタースキー、そこにはスキー産業の展示場としての役割も持たせようとする新たなインタースキーのイメージに沿って、巨大な雪の広場が準備された。

「スキーの万博」とするインタースキーの新たなイメージは固まっていた。

こうしたホビヒラー教授たちの考え方に、疑問を持つ人々もIVSの中にならぬ多くいたと伝えられる。

「インタースキーはお祭りではない」と1979年歳上大会を批判した、プロ部会(ISA)の会長フーベルト・フィンク教授は「インタースキーをイベントとしてはならない」と前回サンアントン大会の直後のISAの総会で語り、商業主義の介入に、またマスコミの過剰な反応に危惧を抱いていた。

「インタースキーはスキー教師たちの集会なのだ」とするその主張はISAのリーダーとして当然であった。

ヨーロッパでは、この10年間はどの間に、スキー業界は低迷を続け、スキー教師が食っていけない状況が生まれている。

さらに、スキーマーケットの縮小は、スキー教師のテリトリーをめぐる紛争を、各地に発生させているのである。

そうした職業上の発生した問題を話し合う場としてインタースキーはあつてほしいとするISAの切実な願いであった。

錯綜するさまざまな思いの中で野沢の人々は、第15回インタースキーのイメージを固めていった。

「湯の郷でスキーが結ぶ心と心」の大会スローガンが生まれ、インタースキーは、世界各國から参加するスキー指導者同士の心温まる交流や地元村民との心のふれあいを大切にする大会として準備されたのである。

## 「スキー先進国の対応」

この野沢インタースキーに参加する各回の対応は、どんなものだったのだろうか。

1951年、この会議を提唱し、アールベルグ峠の近くツールスの斜面で第一回のインタースキーを開いたオーストリアは、それから44年間、この会議の中心であった。

そのインタースキーの宗主国という自負を持つ同は4年前の会議の記念大会を近年アルペンスキーの聖地と呼ばれるサンアントンで開き、40年の総集編とも言うべきインタースキーを演出したのである。

その第14回サンアントン・インタースキーが終了した後でホビヒラー教授は、「次からのインタースキーは一般のギャラリィの人々のためによりわかりやすいた、参加しやすなものにしなければならぬし、開催する同の地元の人々にとっても自分たちのインタースキーだと認識できるものにならなければならない」と語り、従来のインタースキーとは違ったイメージの大会への転換を求めているのである。

その教授の願いは、野沢ではほぼ達成されたと言っている。

一般のギャラリィにとつて親しみやすく楽しめる行事であつたらうし、地元野沢温泉の人々にとつても世界中のスキー教師たちと心を開いて交流し得た大会であつた。

夜遅くまで、街に人々が溢れ、日本の温泉街の風情を楽しむ姿が見られた。

野沢温泉の人々がかかげた「湯の郷でス



# INTERSKI '95 nozawa onsen JAPAN

キヤンペーンとしてフランスス

「スキー活動と自然 環境保全」がシンボ

お祭りムードの中で、日本はインター

大会を終えた日、日本のスキー教師の大先

スキー学校の乱立の問題もまたインタースキー

前々回のバンフ・インタースキーでは、環

「生真面目にインタースキーに  
こだわった日本」

最終日、総会で発表された新しいIVS会

フランスのスキー場にイギリスから送り込

ドイツの立場は、オーストリア、フランス

アメリカ、カナダをして日本というイン

「インタースキーとは、こんなものではな

フランスのスキー場にイギリスから送り込

ドイツの立場は、オーストリア、フランス

アメリカ、カナダをして日本というイン

「インタースキーとは、こんなものではな

フランスのスキー場にイギリスから送り込

ドイツの立場は、オーストリア、フランス

アメリカ、カナダをして日本というイン

「インタースキーとは、こんなものではな

フランスのスキー場にイギリスから送り込

ドイツの立場は、オーストリア、フランス

アメリカ、カナダをして日本というイン

「インタースキーとは、こんなものではな

フランスのスキー場にイギリスから送り込

ドイツの立場は、オーストリア、フランス

アメリカ、カナダをして日本というイン

「インタースキーとは、こんなものではな